

must と have to の比較

根源的用法と認識的用法の観点から

合 田 優 子

1. はじめに

現在のモダリティ分析には、2つの分析の立場がある。単義性分析と多義性分析である。本発表は、単義性分析の1つであると言われる Kratzer (1991, 2012) の可能世界意味論(possible world semantics)から英語の助動詞の考察を試みた。考察対象は must と have to であり、両者を比較した。モダリティには、2つの読み方が存在する。「～しなければならない」という根源的用法(root)と「～にちがいない」という認識的用法(epistemic)である。前者はある事柄に關与する行為者のあるべき姿を話し手が記述するものである。一方で、認識的用法とは、話し手がある事柄をあるがままに捉えた上で、それに関する話し手自身の判断を表すものである。2つの用法の比較をすることによって、must と have to について両者の比較の共通点と異なる点を探る。Kratzer (1991, 2012) の枠組みで両者を考察し、共通点と異なる点を見つける。彼女の枠組みは、3つの道具立てによって構成されている。本研究を通して、彼女の枠組みに沿って両者を比較した。

2. 研究目的、研究方法、明らかにしたいこと

must と have to は形式的な点で、例えば否定形や時制の形は明らかに異なる。しかしながら、意味や用法は似ている。つまり、意味や発話状況に関してネイティブスピーカーでない学習者はどちらを使えばよいか分からない場合がある。ゆえに、意味論からのアプローチが必要であると考えられる。また、Kratzer の可能世界意味論はコンテキストに注目する理論であるので、用法に関しても考察できる。コンテキストを考慮し、モダリティは単一の意味とコンテキストから構成されるというモダリティ分析の立場を単義性分析という。一方で、モダリティの意味は体系的に分類されているとする立場を多義性分析という。本枠組みは単義性分析の立場によって、考察を進めた。最終的に、must と have to の意味論的な違いを学習者に還元できる手がかりを見つけることを目標とした。

研究方法は、must と have to の比較を可能世界意味論から進める方法である。考察対象は根源的用法と認識的用法で、両者を比較し異なる点を再検討した。例文は先行研究に挙げられた例文である。

本研究によって、明らかにしたいことは、根源的用法における must と have to の義務の源と、認識的用法における must と have to で推論が発生する源と、それらが現実世界の状況とどのように関わるかを考察することである。

3. 本研究の枠組み

本研究では、Kratzer (1991, 2012) の可能世界意味論の枠組みを利用した。そもそも可能世界とは、現実世界を含めた過去、未来、非現実世界などの、私たちが想定できる世界のことであり、可能世界は無限に存在すると考えられる。本研究の枠組みは、この可能世界を利用して様々なモダリティを考察するものである。Kratzer の枠組みは可能世界を量化することによって、モダリティを可視化できるものである。

本研究の枠組みは可能性(possibility)と必然性(necessity)という概念を使った二者択一の理論である。二者択一の枠組みを利用することによって、複雑なモダリティを簡潔に捉えることができる。まず、可能性とは、複数ある可能世界の中で、命題が真となる可能世界が少なくとも1つ存在する、と考えるものである。一方で、必然性とはすべての可能世界の中で、命題が真である、と考えるものである。必然性は普遍量子子で表すことができ、可能性は存在量子子で表すことができる。また、本研究の枠組みにおいて重要な概念の1つでは接近可能性(accessibility relation)というものがある。この接近可能性によって、無限に存在する可能世界を制限して、モダリティの考察を行うことができる。

Kratzer の可能世界意味論は3つの道具立てによって構成されている。まず、様相力(modal force)であるが、可能世界の数量を取り扱うものである。様相力は、可能世界の集合の要素の数において、可能性と必然性に振り分けられる。本研究の枠組みはこの2つの概念を使ってモダリティを考察する。(1)は可能性の例である。

(1) 外は雪が降っているかもしれない。

(吉本・中村 (2016: 141))

複数ある可能世界の中で、外で雪が降っている可能世界が少なくとも1つあると考える。一方で、次の例を確認されたい。

(2) 外は雪が降っているにちがいない。

(2)は複数ある可能世界の中で、全ての可能世界において、外で雪が降っていると考える。

次に、様相基盤(modal base)とは、「in view of ~(～に基づいて、考慮して)」という枠組みを基本として可能世界の集合の種類を指定するものである。つまり、どんな可能世界の集合なのかを決定できる道具である。例えば、義務的な会話背景は、命題が義務的な可能世界の集合で真になるような集合を指定する。さらに、順序源(ordering source)は、集合

内の可能世界の順序をそれぞれ決める。その順序によって、何が普通なのか、理想的なのかを捉えることができる。

4. 先行研究と問題提起

Fintel and Iatridou (2008: 117)では、(3)の例文と *ought to* を比較しているが、義務の強さは *must* と *have to* は同じで *ought to* より強いという。つまり、両者は必然性と考えられる。

(3) a. #You must do the dishes but you don't have to. (#は意味的な逸脱を表す)

b. #You have to do the dishes but you don't have to.

(Fintel and Iatridou (2008: 117))

従って、両者の違いは様相基盤か順序源であると考えられる。

さらに、柏野 (2002: 129)では語用論的な転用によって、「控えめ表現」として *have to* が発話されるという。具体的には、意味の弱い *have to* を使うことによって事態を深刻に見せないようにするため、控えめ表現として客観的な *have to* を使うことで *must* より意味が弱くなるという。しかしながら、*must* には勧誘的な用法があるため、柏野 (2002)の提案は必ずしも正しいとは言えない。つまり、主観的な *must* は押しつけがましくなく、聞き手に対して勧誘的であるからである。

さらに、柏野 (2002)では認識的用法の *have to* は強い決めつけのように聞こえるので、語用論的な転用を利用して、ささいな事柄に対しては主観的な *must* を使うという。柏野によれば、*have to* は以前からの知識に基づく判断によるものだという。また、柏野によると、*must* はすでに計画された義務には用いられず、*have to* はすでに計画・存在している義務について言及するという。次の(4)で確認されたい

(4) I have to / *must take the pills every day.

(Declerck (1991: 383))

5. 考察

根源的用法 *must* では、様相力が必然性で、様相基盤は義務的なことに関わりがあり、かつ、話し手の意図に基づくものであると考えられる。また、順序源は話し手の意思を含んだ理想的な観点が関わる。逆に、根源的用法 *have to* は、様相力が必然性で、様相基盤が義務的なことに基づき、順序源が話し手以外のものの観点が関わる。一方で、認識的用法 *must* は様相力が必然性で、様相基盤が話し手の判断に基づく。順序源は、話し手の意思を含んだ観点が関わる。認識的用法 *have to* は様相力が必然性で、様相基盤が話し手以外のことからの判断に基づく。順序源は、話し手の意思を含まない観点が関わる、と考えられる。つまり、外的な観点が関わる。

6. まとめ

must と *have to* は根源的用法と認識的用法において、様相力は両方とも必然性である。しかしながら、様相基盤の観点において両者は異なる。*must* は話し手の意図に関連し、発話時点で発生した義務に基づいた可能世界の集合を指定する。一方で、*have to* は、話し手以外が源である義務（過去のものを含む）に基づいた可能世界の集合を指定する。順序源は、*must* が話し手の意図を含んだ理想的な観点の順序であり、*have to* は話し手以外のものが関わる理想的な観点の順序である。様相基盤とは、会話の背景のことであるので、*must* と *have to* の違いは発話状況によるものから発生すると考えられる。

主要参考文献

Declerck, Renaat (1991) *A Comprehensive Descriptive Grammar of English*, Tokyo: Kaitakusha.

Fintel, Kai and Iatridou, Sabine (2008) "How to Say Ought in Foreign: The Composition of Weak Necessity Modals," *Time and Modality*, ed. by Jacqueline Guéron and Jacqueline Lecarme, 115-141, Berlin: Springer.

柏野健次 (2002) 『英語助動詞の語法』 東京：研究社

Kratzer, Angelika (1991) "Modality," *Semantics: An International Handbook of Contemporary Research*, ed. by Arnim von Stechow, and Dieter Wunderlich, Mouton, 639-650, Berlin: Walter de Gruyter.

Kratzer, Angelika (2012) *Modals and Conditionals*, New York: Oxford University Press.

吉本啓・中村裕昭 (2016) 『現代意味論入門』 東京：くろしお出版